

2013年2月7日  
第4回知の市場年次大会

拠点：東京・お茶の水女子大学 知の市場<sup>1)</sup>  
東京・日本橋本町 知の市場<sup>2)</sup>

## サウジアラビア特論<sup>1)</sup>・新国際石油論<sup>2)</sup>

連携機関：社会技術革新学会

サウジアラビア特論・新国際石油論の開講について

担当講師：帝京平成大学 経営マネジメント学科  
教授 須藤繁

### 開講の経緯

「サウジアラビア特論」の前身は、知の市場で、2010年度から3年実施された「国際石油論」である。同講座は、国際石油論という科目名で実施されたが、内容はサウジアラビアの石油産業動向に大きく傾斜したものであった。そこで、本年度からは、石油産業動向に関して、「新国際石油論」を別途開講（開講機関：関東化学・お茶の水女子大学 LWWC 増田研究室）し、サウジアラビアに関しては、「科目名：サウジアラビア特論」、「副題：日本とサウジアラビアの戦略的互惠関係発展のための条件を考える」として再構成することとした。

### I. 「サウジアラビア特論」

#### (1) 科目概要

「サウジアラビアが我が国にとって最大の供給国である石油の供給は、経済・産業活動のみならず、国民生活の安全保障にとって最重要課題の一つである。サウジアラビアは世界最大の石油資源保有国として穏健な価格政策で石油市場の維持拡大を目指し、石油市場の安定性を確保しようとしている。こうした石油政策は無資源国である日本として尊重すべきものであり、日本はサウジとの貿易・投資関係の拡充を通じて互惠的な関係に立ち得る。今日サウジアラビアは人口爆発、若年層比率の急増を背景に、雇用機会の創出、教育訓練プログラムの拡充、女性の社会進出の確保という喫緊のニーズを抱える。戦略的互惠関係の強化を両国の将来関係の基礎に位置づけ、多様な分野で重層的な関係を構築することが重要である。」

## (2) 講義計画

2013年4月17日～7月24日の15回。各回の講義テーマは、以下のとおり。

- 第1回：はじめに／サウジアラビアの多様性
- 第2回：石油発見前の歴史とサウジアラビアの本質
- 第3回：1970年代のサウジアラビア
- 第4回：1980年代のサウジアラビア
- 第5回：1990年代のサウジアラビア
- 第6回：2000年代のサウジアラビア
- 第7回：世界とサウジアラビア
- 第8回：石油価格高騰時における対応
- 第9回：石油発見、主な油田と生産原油
- 第10回：石油産業の全般的統合
- 第11回：石油時代はいつまで続くか
- 第12回：サウジアラビア経済開発計画の進展
- 第13回：サウジアラビア社会の変容
- 第14回：サウジアラビアの人材開発プログラム
- 第15回：日・サ関係の歴史と将来展望

## (3) 講義内容の詳細

第1回では、講義の問題意識と到達点を確認した後、導入としてサウジアラビアの多様性を、地理、地質、気候面から確認する。併せてエネルギー供給に占める現在及び将来の石油の位置を確認し、石油の経済活動・社会生活にとっての重要性を検証する。

第2～6回は、サウジアラビアの歴史を概観する。まず第2回は、サウジアラビア社会の、石油発見以後も変わらない要素を、部族社会の伝統、サウド家とシェイク家の同盟の点から確認する。第3回は、第一次石油危機は、様々な要因（複合要因）により勃発したことを確認する。第4回は、1970年代の石油価格の引上げによる石油収入増を背景にサウジが1980年代に取り組んだ経済開発目標と国造りの基本理念を確認する。第5回では1990年8月に勃発した湾岸危機・湾岸戦争がもたらした影響を検証し、第6回は2001年9・11同時多発テロのサウジ社会への影響、及びサウド王家の対応を検証する。

第7～11回までは、世界に占めるサウジアラビアの位置を、石油埋蔵量、原油生産能力、余剰産油能力の点から分析する。具体的には、サウジアラビアの石油産業、サウジアラビア石油政策の特徴、及びユニークさの背景を検証する。さらに、上流と下流部門の統合という観点からサウジアラビア石油産業の現発展段階を確認し、近年の非在来型資源（シェール層）の開発はサウジの石油戦略にどのような影響を与え得るかを検証する。

第12～15回は、それまでの講義と経済開発計画の進捗、近年のサウジアラビア社会の変

容、人材開発計画の進捗状況を踏まえた上で、サウジアラビアと日本の将来を展望する。

#### (4) 科目の到達目標

サウジアラビアは現在、人口爆発、若年層比率の急増を背景に、雇用機会の創出、教育訓練プログラムの拡充、女性の社会進出の確保という喫緊のニーズを抱えている。戦略的互惠関係に立ち得る日本・サウジアラビア両国は、関係強化を両国の将来関係の基礎に位置づけ、多様な分野で重層的な関係を構築することが重要であるとの認識を共有する。

## II. 「新国際石油論」

### (1) 科目概要

「今日、石油は経済活動・社会生活の根幹をなし、国際経済と国際政治に大きな影響をもたらす。20世紀は、「石油の世紀」といわれたが、21世紀に入って以後、開発された非在来型資源（とりわけ、シェール層資源）は、21世紀も暫くは「石油の世紀」が続くことを示唆している。本講義においては、石油産業の成り立ちと石油の持つ地政学的な意味をおさえ、石油資源の価値を最大限実現するための条件を考えるとともに、石油の持つ政治的・経済的な意味を世界史的観点から論じる。」

### (2) 講義計画

2013年4月9日～7月16日の15回。各回の講義テーマは、以下のとおり。

第1回：はじめに（石油産業の諸要素）

第2回：一次エネルギーとエネルギー変換

第3回：エネルギーと経済（弾性値）

第4回：探鉱・開発・生産部門における技術革新

第5回：輸送部門における技術革新

第6回：精製部門における技術革新

第7回：販売部門における技術革新

第8回：国際石油カルテルの形成とOPECの台頭

第9回：1970年代の石油危機と消費国の対応

第10回：1980年代の石油情勢（石油価格の崩壊とサウジアラビア）

第11回：湾岸戦争の今日的意義（1991年代の石油情勢）

第12回：資源ナショナリズムの再昂揚と石油の金融商品化（2001年以後の石油情勢）

第13回：オイルピークとシェールガス革命

第14回：自動車と自動車燃料の歴史

第15回：講義のまとめ（3・11後のエネルギー情勢）

### (3) 講義内容の詳細

第 1 回では、講義の問題意識と到達点を確認した後、導入として石油産業の構造、部門別特徴、資源賦存状況、生産動向、貿易構造を確認し、第 2 回一次エネルギー供給、第 3 回エネルギーと経済に関する講義の前提を確認する。

第 4～7 回は、石油産業の要素（部門別展開）と戦略的意味を跡付ける。第 4 回は、石油産業の成り立ちと石油の持つ地政学的な意味をおさえ、石油資源の価値を最大限実現するための条件を考える。第 5 回は溶接技術、鋼材の圧延技術等に関する技術革新によりもたらされたタンカーの大型化は、世界の石油供給をどう変えたかを検証する。第 6 回は、精製技術革新がもたらした産業構造・製品需要構造の変化の社会的意義を検証する。第 7 回では販売部門における販売・在庫管理、環境対策に関し給油所動向を中心に考え、併せて、石油サプライチェーン全般の現状と課題を抽出し、生活の安全保障の確保に果たす石油産業インフラの社会性・公共性を検証する。

第 8～12 回までは、国際石油産業史と世界の政治・経済を概観する。第 8 回では国際石油カルテルの形成と OPEC の台頭、第 9 回では 1970 年代の石油危機と消費国の対応、第 10 回では 1980 年代の石油情勢（石油価格の崩壊とサウジアラビア）、第 11 回は湾岸戦争の今日的意義（1991 年代の石油情勢）、第 12 回は資源ナショナリズムの再昂揚と石油の金融商品化（2001 年以後の石油情勢）を取り上げる。

第 13～15 回は、石油供給の将来展望と世界秩序への影響を取り上げる。第 13 回ではオイルピークとシェールガス革命、第 14 回では自動車と自動車燃料の歴史を取り上げた後、第 15 回は講義のまとめとして、3・11 後のエネルギー情勢を取り上げる。

### (4) 科目の到達目標

石油供給構造の変化がもたらして来た政治・経済情勢の変遷を学び、石油資源の価値を最大限実現するための条件に関し、自らの視点を確立すること。

以 上